

市民向け講座「『仙台誕生』からの災害とまちづくり」で講師を務めました (2026/2/7)

テーマ：仙台の災害、歴史、記録

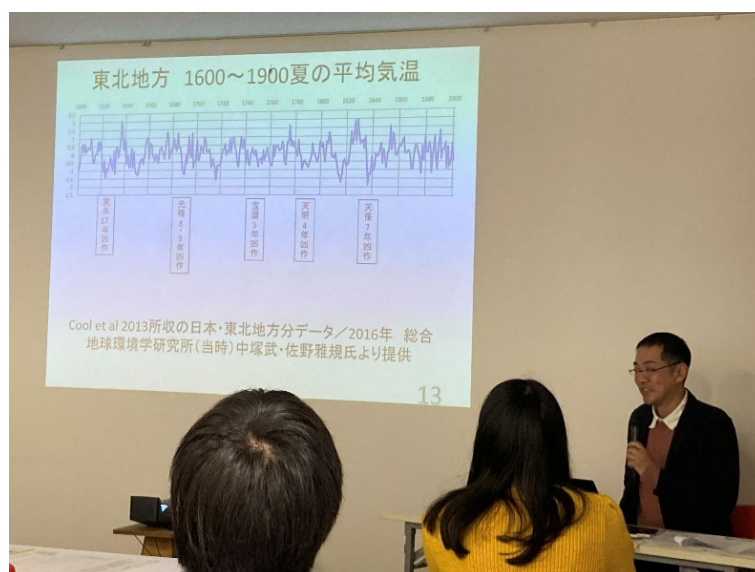
会場：せんだい3.11メモリアル交流館

仙台市の地下鉄東西線荒井駅舎内にある「せんだい3.11メモリアル交流館」で2026年2月7日、佐藤大介准教授（歴史文化遺産保全学分野）が「『仙台誕生』からの災害とまちづくり」と題した講座で講師を務めました。

荒井駅は仙台市街地から東部へ続く地下鉄の終点で、東日本大震災で津波被害を受けた沿岸部へのターミナル駅でもあります。本講座は開館10年を記念した企画展「あの日から海辺と歩いた10年 荒井駅から青葉山への軌跡」の関連講座として開催されました。

慶長6（1601）年に伊達政宗が仙台城の築城を始め、「仙台」が「誕生」しました。以来425年間、人生で一度も災害に遭遇しなかった人はいないと言ってよいほど、仙台では幾度も地震・津波、洪水、冷害（飢饉）に見舞われてきました。講座では、災害に対して仙台では様々な工夫がなされてきたこと、たとえば佐藤准教授の専門である飢饉への対応では、燃料や非常食になる海岸林の整備、他領からの米の調達、備蓄蔵での米や麦の備蓄などが行われたことを紹介しました。

最後に、歴史や記憶を残すことの意義について述べました。過去の災害の記録は、石碑や文書、そして現代ではデジタル媒体への記録として残されていますが、石→紙→デジタルの順で「残そうという意志がなければ残らない」。そのため、「必要があるときには思い出せるような環境を整えるにはどうしたらいいか、みなさんと一緒に考えたい」と佐藤准教授は話しました。



東北地方や仙台の災害の歴史について話す佐藤大介准教授